

破瓜の痛み

雷藤和太郎

「お前は本当に運の悪い奴だよ」

久しぶりに飲み連れあった友人に、乾杯直後に言われた。

「いや、全くそうなんだよ。正直な話、今こうやって飲みに来ているのも俺は恐ろしいんだ。この話をどこかで聞かれてしまえば、いきなり後頭部に罵声とカクテルとを浴びせかれられきゃねないし（呂律が回らない）、だから今日はその話は止めにしようぜ」

「周りに聞こえないように話せばいいじゃないか。幸いにも偶然にも結構距離のある個室なのだから、今日くらいは気兼ねなく日頃の毒を吐き散らせばいい。放射能を撒き散らしてもいいぜ」

「洒落にならん冗談は止してくれ」

友人の明け透けな態度に段々腹が立ってきた。もともと酒にあまり強くないことと、このところずっと十分に眠れていないので――それは仕事が忙しいというのもあったが、それ以上にストレスによる不眠が大きかった――、酔いが早かった。語気が思わず強くなり、ジョッキが机にゴツンと叩きつけられる。半分ほど残っていた中身が瞬間泡だった。友人は一瞬怯んだが、すぐにさっきまでの調子を取り戻して、おどけるように言った。

「やっぱりストレスだよ、ストレス。まあ、仕方ないとは思うけどね。入ったばかりの新入社員のくせに、四方八方から非難されてるんだろう」

友人は憐れんだ目で俺を見た。この友人以外の人であれば、すぐさま頭が沸騰し、持っていたジョッキで殴り殺していたかもしれない表情だったが、長年の付き合いがあったからだろう、俺をそんな気分にはさせなかった。むしろ、その友人の酷く同情的な態度に共感してしまって、目に涙すら浮かべてしまった。

ふいに大粒の涙が、ポロリとテーブルに落ちると、その後の涙腺はもはや決壊したダムだった。目は確かに開けているはずなのに、全く前が見えなかった。その場に伏せてしまうこともせず、椅子に座ったそのままの状態ですべて泣いた。自然と嗚咽も混ざってきた。

俺はこの3月から今までの苦勞を思って泣いた。

去年の4月から、俺はT電力で働くことになった。必死になって就活した結果だったから、嬉

しさも一入だった。大企業に入ったことを親は褒めてくれたし、また親も親戚から褒められた。そうやって俺がT電力で働けるようになったことは、俺の誇りになった。

最初は仕事に慣れるよりも社会になれることのほうが重要で、俺は例に漏れず大学時代と社会で働くこととのギャップに悩まされた。年の行った上司の特に無能な奴（3ヶ月もしないうちに、無能な奴が無能であるを見抜ける。無能な奴は本当にそのくらい無能に見えたのだ）から浴びせられる言葉と態度に辟易しながらも、この会社で仕事をしていく為に我慢し続けることを覚えた。それこそ新入社員の仕事なのだと割り切った。

仕事量は多かったが、覚えは早かったのも、それほど苦労はしなかった。月の残業時間はかさんだが、その分もらえる給料に俺は毎月驚かされた。使うだけの時間はあまりなかったのも、通帳ばかりが膨らんでいった。それもまた楽しかった。

半年もすると手に仕事が懐きはじめた。年が明けるところには、理不尽な上司の機嫌との兼ね合いが上手くなった。1年叩き上げられて、今年度が終わると思った矢先にあの地震が起きた。

それからの事は世間のニュースの方が詳しいだろう。何せ俺は原発とも原発を推進するT電力の中央権力ともほとんど関係の無い平社員だったのだから、ニュースに流されている以上のことを知ることは出来なかったし、そもそもニュースが流れている頃は寝る暇もないほどだった。上が決めた計画停電に伴う様々な雑事と、鳴り止まない電話への対応、原発に隠れてあまり報道されなかったが、地震で損傷したその他の発電所の対応など、現場がやることは二次曲線的に増えていった。

それと同時に、多くの人がストレスと過労で機能不全に陥った。真っ先に不調を訴え始めたのは無能な奴らだった。大した仕事もしていないのに、地震以降出勤日数は見る間に減り始め、ついに有給を使い切るほどに休んだ。ようやく出勤したかと思えば、仕事を中途半端に投げ出してまた休んだりした。そのフォローもしなければならなくなり、職場は実に殺伐とし始めた。普段なら入社一年も経ってないような社員にふらないような仕事が振られるようになって、気がついたら眠れなくなっていた。それでも、努めて休むことをしなかった。それは何よりも、無能な奴らから休んでいく現状を見て取って、今休んでしまっただけでは後々勤務評定に響くという打算の他に、俺さえも休んでしまったら、いよいよこの職場は機能しなくなる、と思わせるほどの多忙さに使命感を覚えたからだ。

しかしそれも長くは続かなかった。ある朝突然体が動かなくなるると同時に、猛烈な頭痛と腹痛に襲われた。身じろぎ一つ出来ず、体の深奥から発せられる痛みを耐え続けた。次に気がついたら正午を回っていた。俺は初めて無断で会社に遅刻した。

周りの人は余所余所しいほどに優しくなった。確か4月の終わりごろだったと思う。その段にな

ってようやく俺は少しだけ周りが見えるようになった。そういえば、今年の新入社員はどうしたのだろうか。確か結局この職場には新入社員は来ないことになったんだっただけか？同僚の顔はどうなっているか。皆、精気を失って目下が隈どられている。風が吹いたら飛んでいきそうだったし、突いたら粉々に崩れてしまいそうだった。勿論俺もそのような状態だったに違いない。

その時になって、初めて原子力発電というものを怨んだ。それを推進してきたT電力の中央権力を怨んだ。俺たちがこのような目にあっているのも、全て彼らの危機管理能力の欠如の為だ！今どこかの会議室にT電力の権力が一挙に集っている場所が分かったならば、乗り込んでいって一人残らず殺してしまっても罪に問われることは無い！とさえ思った。

遅刻した理由を、仕事の合間に上司と話した時のことである。仕事をしているうちに、自然と仲良くなっていったその上司はまだ30代ほどで、地震が起こる前までは精気に溢れていた。健全な出世欲のようなものがあって、俺は尊敬の念を自然と抱いていた。

「俺もさ、もう駄目なんだよ」

と、弱々しげに上司は言った。

「もうこの会社で働いていくビジョンがさ、見えなくって。これからどうなるのか、勿論上の人たちは、T電力が潰れないように精一杯努力するだろうし、そのために色々政治的な働きかけをしていくと思うんだよ。だけど、それでもちょっとこれからどうなるか分からなくって、そうしたらさ、先週だったかな、おしっこに血が混ざり始めたんだよな。血尿って奴？それからずっとだよ。今も、血尿が出続けてるんだ。怖いけど、病院に行く暇もないし、これから会社がどうなるかも分からないから、分からないなら、会社と心中するのも良いかな、って思ったり、ナ」

俺の尊敬する上司の姿はそこには無かった。その時は実に無感情にその話を聞いていたが、今思えば、俺もこの上司と同じだったのかもしれない。

入社して働くこと、働けることに誇りをもっていった。俺だけでなく、俺の周りの人も、俺を後押ししてくれた。そんな状態だったからこそ、俺はずっとT電力で働くために頑張ってきた。今頑張れば、T電力は簡単には潰れないと思ったし、俺の中にある会社に対する健全な出世欲が、俺の頑張りは俺に報いるはずだと思ったのだ。しかしそれは、東京電力が潰れれば、俺もまた一緒に潰れてしまいたい、という心中意識の表の顔だったのだろう、と思うのだ。

それから週末になって、駅のホームでぼんやり佇んでいる俺を、友人がたまたま見つけたのだった。

「で、これからどうするんだ？」

ようやく涙が枯れたころ、友人が俺に訊いてきた。

「これから、って何だよ？」

「これからだよ、T電力を辞めるのか？それとも辞めないで、最後まで戦い続けるのか？言っておくが、俺はどっちが良いかなんて分からないし、どっちを勧めるわけでもないからな。お前がこれから30年間、いや、向こう10年で良いや、人生の3分の1くらいを捧げるに当たってだよ、どう考えてるのかな、って事だよ」

俺は何も浮かんでこなかった。そもそも、まだそんな事を考えるだけの心の余裕がなかったのだし、増してや未来を考えるなんてこと、出来ようはずも無かった。だから俺は正直に話すしかなかった。

「分からない。何も、考えてないし、考えられない」

すると友人はあっけらかんと言うのだった。

「じゃあ、これから考えないとな」